

エリカ (M) 「これから始まるのは、生ボイスドラマコーナーです！」

エリカ (M) 「どこかにある『カルモア学園』にノール先輩とわたし、候補生エリカが学生として潜入して、学園にはびこる悪臭の元を消臭して、世界から悪臭をなくすために戦うと言うお話です」

エリカ (M) 「タイトルは——『デオフェアリーノールと秘密の部室』」

エリカ (M) 「これは、愛と勇気と真実と消臭の物語である」

エリカ (M) 「出演…デオフェアリー・ノール、秋山えりか、スタッフ先輩、たけちゃん」

エリカ (M) 「脚本、上城友幸」

エリカ (M) 「では、物語……スタート!!!」

一拍の間

ノール(M) 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル9 『アンモニア』」

一拍の間

ノール(M) 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール(M) 「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

えり 「おはようございます」

ノール(M) 「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。

新入生で、消臭部に入部してきた変わった子。

どんな子なのか、まだ、よくわかんないんだよね」

ノール 「じゃーん！」

エリカ 「今週も服装が違ってたことですね？」

ノール 「今日は、駄目なひとには見えないワンピース！」

えり 「夏休みの登校バージョンですか」

エリカ 「ふあー、すずしそうです」

ノール「そう。マキシ丈ワンピースにシフォンブラウスを合わせて、大人っぽく着こなしてみた」

えり「魅力満点です」

エリカ「あー、大人っぽくて、すらっとしていないと厳しい組み合わせですね。やっちゃいましたね」

ノール「エリカ？」

エリカ「世界が嫉妬する着こなしですね、お姉様（棒）」

ノール「エリカは、ダメな人には見えない虎ジマビキニ？」

エリカ「違います、普通の格好です！ そんな格好で外歩いたら、通報されます！」

えり「はうー、おまわりさんこっちです」

エリカ「呼んだの!？」

ノール「で、えりは……ダメな人には見えない、Aラインのフルーツ柄サマードレス。麦わら帽子と籐かごで夏休みっぽさをイメージ」

エリカ「あ、あざとい……」

えり「はわ、日差し強いから帽子かぶってきました」

エリカ 「でも、麦わら帽子とバスケットが似合ってるって言うのが、あざとくてずるいですよね」

ノール 「そーだね、ずるいよね」

エリカ 「お姉様だったら『山へ芝刈りに行きました』みたいになっちゃうのに」

ノール 「エリカッ!」

一拍の間

エリカ 「今日はどこ行きますか？」

ノール 「……山へ芝刈りに行こうか？」

エリカ 「根に持たないで下さい。いいトシした大人なんですから」

ノール 「ノール、まだまだ子供だよっ！」

えり 「ノール先輩、お若いから大丈夫ですよ」

ノール 「学校の先輩後輩で言う台詞じゃないっ！」

えり 「はわーっ!」

エリカ 「それで、どこに行くんですか？」

ノール「体育館の裏に行こうか」

エリカ「なんか昭和のスケバンみたいですね」

ノール「そーだね、いい機会だから一度シメたほうがいいかもね」

えり「あうー、暴力反対ですよー」

ノール「じゃあ、行こー！」

エリカ「はい、行きましょう」

SE…ガチャ、とドアが開く&閉まる音。

一拍の間

バスメル「こんにちはは、ノールちゃん!!」

ノール「うわあっ!?!」

エリカ「いきなりドアの向こうに王子がつ!!」

えり「びっくりしましたー」

バスメル「夏休みだけど、部室の方で音がしたので「もしや?」

と思ってきたんだ。あえてうれしいよ、ノールちゃん」

エリカ「相変わらず、わたしたちはガン無視ですね」

ノール「いーよ、会話に混ざって。ノールが許可するから」

エリカ「遠慮します」

一拍の間

ノール(M)「そんなわけでえ……(やる気なさそうに)」

ノール(M)「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目の

お兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール(M)「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、

ニックネームってヤツ？」

ノール(M)「なんでも知らないけど、わたしのことを妙に慕っ

ていて。何かというと、つきまといっただけのクサイ台詞で口説

こうしてるんだけど。ノール、クサイ台詞って大の

苦手なんだよね」

一拍の間

バスメル「キミと出会うと、鼓動が高鳴り身体が熱くなるんだ。

ボクにとって一番の『生きてる』って瞬間だね」

ノール「なに？ 更年期障害ってヤツ？」

エリカ「相変わらず、バツサリと話をぶった切りますね、お姉様」

一拍の間

えり「ふわあ〜……情熱的で素敵ですねえ〜。聞いてるだけで、

顔がほてってしまいます〜（照れ）」

ノール・エリカ「「おーーーーーいっ!?!」」

ノール「えりも更年期障害じゃないの!?!」

エリカ「なんで、そんなに毎週毎週バスメル王子の台詞が刺さる

の!?!」

えり「えうう、素敵じゃないですか〜？」

ノール「全然（すっぱり否定）」

エリカ「まったく（すっぱり否定）」

えり「ふええ〜……」

バスメル「今日は私服なんだね？」

ノール「見ての通りです」

バスメル「キミが着ている服の色が、今日のボクのラッキーカー

ーさ」

ノール「……チェック柄なだけど？」

エリカ「ピンクと紺とグレーと白がラッキーカーなんじゃない

ですか？」

えり「ふわあ、ラッキーマンですねえ」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ダウンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

えり「かわいいですねえ。どこで手に入るんですかあ？」

ノール「はい、今週もこれからステルス・マーケティング！」

ドワンゴ・ドット・JP取り放題の会員登録をすれば、
いろいろな着ボイスがゲットできるから、えりも会員登録
録した方がいいよ」

えり「はい、ありがとうございますう！」

エリカ「やっぱり、まだ会員登録してないんですね」

ノール「しびれを切らせて、先週かみじょーが登録したって言った」

エリカ「マナーモードにするの忘れて『ノールの豆知識っ！』って響き渡ったけど、職場の人たち全員に聞いて聞かない
ふりされたらしいですね」

ノール「業務用の携帯で登録するかみじょーが悪い」

えり「みなさん、おとなですねえ……」

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「はい、ごきげんよう（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のラッキー・スター!!」

SE..歩く音(F.O.)

一拍の間

ノール「アーリーバスメルタイムは、どつと疲れるよ」

エリカ「脱力しますよね」

えり「すてきだと思っんですけどお……」

エリカ「さて、行きますかお姉様？」

ノール「よし、行こうっ！」

エリカ「りょうかい」

えり「はっい！」

SE..歩く音(F.O.)

一拍の間

エリカ「あんまり、こないですよね。校舎裏」

ノール「まあ、用事無いよね」

エリカ「お姉様は、タイマン張るときによく使うじゃないですか」
ノール「タイマンってなに？ タイガーアンド何とかってヤツ？」
エリカ「中途半端なボケを、ありがとうございます」
えり「あ」

一拍の間

えり「ふあく！ あそこに、ねこさんがいますよ」
エリカ「ホントだ、かわいい。まだ、子猫ですねえ」
ノール「にゃんこ！（上にかぶせるように）」
エリカ「にゃんこ？」

SE: 駆け寄る音

ノール「アハハハッ！ にゃんこかわいいー！ にゃんこかわ
いいーっ！（着ボイス口調で）」

エリカ「お、お姉様……？（引き気味に）」

えり「ふあく、ねこだいききなんですわねえ……（引き気味に）」

ノール「ほらほら、おいで〜」

ノール「――あ」

SE:子猫の鳴き声

エリカ「あー、行っちゃいましたわね〜」

えり「ざんねんですわねえ」

ノール「ざんねんっ！ でも、そういうところがかわいいよね」

エリカ「そういうものでしょうか？」

ノール「そういうもの……ん？」

エリカ「なんか……臭いですね」

ノール「……猫のトイレ砂の臭い？」

エリカ「おねえさま、それ猫飼ってない人にはわかりません」

えり「たしかに、おトイレのにおいです〜」

ノール「猫トイレのアンモニア発生量は、犬トイレの20倍！

どこかにアンモニアがいるはず！」

エリカ「本当ですか？ 猫トイレがどこかにあるだけじゃないんですか？」

一拍の間

アン「残念だけど、ここにいるのよね」

SE…それっぽい登場SE

エリカ「なんか、色っぽい人ですね」

えり「ふあ、おとなですねえ」

ノール「で、誰？（不機嫌）」

アン「わたしは『アンモニアのアン』。よろしくね」

一拍の間

エリカ「アンモニア!? デオアリーナでは全部の場所における、
便利なカードだという、あの!?!」

ノール「何の話?」

エリカ「でも、スタイルいいよねえ?」

えり「はうう、うらやましいです」

ノール「もしもーし? ごめんくださいーい? きこえていますかー
??」

一拍の間

エリカ「やっぱり、あなたも悪臭17人衆なんですか?」

アン「そうなんだけど、悪臭四天王でもあるのよね」

エリカ「四天王!?!」

ノール「でたなー! 姉ちゃんエケツ四天王!!」

アン「あら、ありがと☆」

エリカ「……お礼言われましたよ、お姉様」

ノール「この間のノネノールといい、四天王は変なのばかりなの!?」

えり「でも、すごくスタイルが良くて美人です」

エリカ「確かに。なんか、コーラビンみたいなスタイルですね」

えり「うらやましいです。ボン・きゅっ・ぼん——ってかん

じですわー」

エリカ「でも、駄目な人たちにはお姉様みたいな真っ平らな方が、

アピール度高いですから大丈夫ですよ！」

ノール「真っ平らって、どういうこと!? ノールもボン・きゅっ

・ぼんってなってるよ！」

エリカ「いやあ……どう見ても『つる・ぺた・ろり』ですよわ」

ノール「エリカっ!？」

一拍の間

エリカ「では、気持ちを切り替えて！ 今週のイラスト募集は

『夏のバカンス！ 私服のノールお姉様』です！」

えり「採用された方には、『特製・マキシ丈のワンピースバー

ジョン』の デオフエアリー・ノールをプレゼントしち

やいますー」

ノール「だからっ!! 募集しないよっ!! カルモアさんにも、特

製品つくってとか言わないからね!!」

アン「そうなの？ 欲しいわよね」

エリカ「ワンピースの下に水着を着て、プールに出かけると言う

シチュエーションのイラストとか、大歓迎です！」

ノール「そのあと、着替えのパンツ忘れてたって、使い古された

オチ禁止!!!」

一拍の間

ノール「で、どうしてこんなトコにいるのかな？ 普通、アンモ

ニアだったらトイレとかでしょ？」

アン「わたしはもともと、どこにでもいる悪臭なのよ」

アン「最初は違うニオイでも、原因を放置しているうちに、わ

たしが発生する——と、言うのはよくあるケース」

アン「特にならなくても、私において学園を満たすこと

は簡単なの」

ノール「放置すればそうかもしれないけど！ ノールは絶対に、

悪臭を見過ごさないんだから！」

アン「そうなの？ どうやってニオイを消すのかしら？」

ノール「こうやってっ！ ——華麗に変身ッ！ でおどあーっ!!」

SE..変身SE&BGM

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

アン「うふふ、やっぱりあなたがかわいいデオフェアリーだったのね」

エリカ「かわいい!? (驚愕)」

ノール「毎回毎回……エリカのリアクションは失礼だよね!」

エリカ「スママセン、びっくりしたもので」

ノール「なんでびっくりするのかな? (おっかない笑顔)」

えり「そうですよ、ノール先輩はちっちゃくって、かわいいです」

エリカ「……わたしが間違っている気分になってきますね。

おかしいなあ」

ノール「おかしくないよ! 多数決で、ノールがかわいいのは証明されてるじゃん!」

エリカ「民主主義の限界ですね……」

一拍の間

アン「大丈夫、ノールちゃんはかわいいわよ」

ノール「でしょお!？」

アン「ええ、子供みたいで☆」

ノール「……エリカ、やっつける!!」

エリカ「思いつきり逆恨みじゃありませんか、お姉様（呆れ）」

ノール「うるさーいっ! あのボインをやっつけるっ!!」

エリカ「さすがにいくらい、逆恨みですね——でも、いきます

よっ!」

一拍の間

エリカ「でよ、でよどやーっ!!」

SE:ガード音

アン「ふふふ、まだまだね」

エリカ「わ! ガードされましたよ、お姉様!？」

アン「じゃ、こっちの番ね……トイレのニオイを、臭塗っ!」

SE：臭塗っぽいSE

エリカ「うわっ！ くっさっ!!」

えり「すごい、刺激臭ですうー」

ノール「やっぱり、にゃんこのトイレ砂ーっ!!」

アン「うふふ、どう？ この濃度だと刺激も強くて、目に

しみるかしら？」

エリカ「ニオイが、服についちやうよーっ！」

ノール「おのれー、ボイン！ えりもいけーっ！」

えり「はわー！？ エリカ先輩でもダメなのに、わたしじや

むりですうー」

ノール「毎回、エリカよりえげつない攻撃してるよね!？」

エリカ「ここはひとつ、お姉様が！ 色々抱いたコンプレック

スをたたきつける感じで！」

ノール「もうっ！ とにかく、ボインは敵だ！ やっつけるっ！」

ノール「デオ・デオドアーッ!!」

SE…デオ・デオドアーのSE

アン「うわー、だめだー!! (棒読み)」

SE…悪臭退散のSE

ノール「やっつけた!」

えり「ふわあ、さすがノール先輩です」

エリカ「本当に、色っぽい女性には容赦ないですね」

ノール「どーだ、まいったかボイン!!」

一拍の間

ノール「四天王……あとふたりもこんなのがいるわけ？」

エリカ「わたしに聞かれても、わかりませんよお姉様」

えり「どんな人たちがやってくるんでしょうねえ」

ノール 「どんなのでも、消すよっ！」

エリカ 「かっこいい男の子でもですか？」

ノール 「情け容赦なく、消す。ていうか、ノネノールみたいの

だよ、どーせ」

エリカ 「お姉様がもうすこし色っぽければ、かっこいい悪臭成分

とかきたかもしれないのに、残念ですねぇ

えり 「ですねぇ」

ノール 「ちよつと、失敬だよキミタチっ!？」

一拍の間

エリカ (N) 「こうして、アンモニアは消臭された」

エリカ (N) 「しかし、これで終わりではない」

エリカ (N) 「残る四天王は二人。いったいどんなニオイがやっ

てくるのだろうか？」

エリカ (N) 「ノールはボイン、ボインと連発していたが、それは思いつき昭和の呼び方ではないのか？ 若い視聴者のみなさんは、言い出しっぺの大橋巨泉とか知らないのではないか？」

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない……」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「また、来週も……」

ノール (N) 「『デオ・デオドアー！』」

おわり。